

調整員 被災地で奔走

NGO「AMDA(アムダ)」(本部・岡山市)に今春就職し、5月のジャワ島中部地震では、調整員として被災地で、緊急医療支援活動をした。「被災者の命を救う仲間の医師たちを、そばで笑顔で支え、健康回復に貢献したい」。今回の派遣で調整員の果たすべき役割をはっきりと認識できた。その思いを胸に、ビザが取れ次第、担当を任されたミャンマーの少数民族の村に赴く。

国際協力に関心を持ったきっかけは、小学生のころテレビで飢えたエチオピアの子どもを見たこと。ショックで、「どうして」と思った。発展途上国の就学率に関心を持ち、大学で教育を専攻した。しかし、就学前に半数の子どもが死ぬ国があるのを知り、今度は米国の大学院で健康支援策を研究した。

大学院には、祖国を救おう

AMDA職員 畑山 ゆかりさん 32



「仲間の医師らを支えて被災者の健康回復に役立ちたい」と語る畑山さん

と向学心に燃える途上国からインターネットの求人サイトの院生がいた。彼らの国を支援するNGOで働きたいと思ったが、社会経験が必要と言われ、ひとまずメーカーに就職。約2年後の2003年4月から2年半、青年海外協力隊員になった。グアテマラで感染症対策の啓発セミナーを開いたり、家々を回って害虫被害の有無を調べたりした。帰国後、進路を迷ったが、自分が学んだ保健の知識を生かして海外支援がしたくて、

なく、自分たちが調整役。山の本部と連絡を取りながら、様々な国からの医師や看護師を受け入れ、地元の保健所と相談して派遣先や宿泊施設、物品の調整、食事の段取りなどを決めた。

宿の準備ができていないのに、人がどんどん送られてきた。医師に来てもらっても寝てもらおうところが無い。準備が整わない。不安で、本部に電話しながら泣いたこともあった。先輩に「医療チームに心配をかけるよ」と指摘され、目が覚めた。医師らを支えるのが自分の仕事。努めて笑顔を見せた。

5月28日、地震の翌日にインドネシア入り。島中部のプランバナンの村に着くと、周辺の町や村と同じく、多くの住民が家を失い、傷の手当ても十分受けていなかった。青年海外協力隊員で海外に行くのと違って、受け入れ機関は被災地で、親や子どもを亡くし、傷ついた住民を見て、家族が、健康にそろって食事をするのが、一番の幸せだと、つくづく思った。その健康を守りたい。次はミャンマー。現地では、たくさんの少数民族の人たちが、薬ではない暮らしを送っているという。「どうすれば、より住民の健康を守れるか。今回の経験を生かして冷静に活動したい。住民が元気に暮らせるよう頑張る」

(池田ちひろ)

次の赴任先はミャンマー 住民の健康守りたい